

令和 6年 2月

紙谷 悠 学位論文審査要旨

主 査 藤 原 義 之
副主査 梅 北 善 久
同 磯 本 一

主論文

Comparative study between histochemical mucus volume, histopathological findings, and endocytoscopic scores in patients with ulcerative colitis

(潰瘍性大腸炎患者における組織化学的粘液量と病理組織学的所見と光学式超拡大内視鏡スコアの比較に関する研究)

(著者：紙谷悠、菓裕貴、神田努、池淵雄一郎、吉田亮、河口剛一郎、八島一夫、梅北善久、磯本一)

令和5年 Medicine DOI:10.1097/MD.00000000000033033

参考論文

1. New closure method using loop and open-close clips after endoscopic submucosal dissection of stomach and colon lesions

(胃および大腸内視鏡的粘膜下層剥離術後における新たなloop and open-close clips縫縮法)

(著者：吉田亮、菓裕貴、池淵雄一郎、河口剛一郎、八島一夫、紙谷悠、安井翔、中田裕資、神田努、高田知朗、磯本一)

令和3年 Journal of Clinical Medicine DOI:10.3390/jcm10153260

審査結果の要旨

本研究は潰瘍性大腸炎患者の大腸生検組織をカルノア溶液で固定して、組織化学的な粘液量を定量的に評価し、内視鏡所見および病理所見との相関性を検討した。結果としては内視鏡所見（local Mayo endoscopic subscore (L-MES)、光学式超拡大内視鏡（EC）分類）および病理組織学的所見（粘膜の炎症度、陰窩膿瘍の有無、杯細胞減少の程度）とカルノア固定で作成した病理組織標本の大腸腺管内腔に残存する相対粘液量との間に有意な相関を示した。特に粘液量はEC分類の所見悪化とともに有意差をもった段階的な減少を示した。本研究でのEC分類に基づく段階的な腸管粘液量の相関は、病理組織学的寛解に加えて機能的寛解を反映している可能性がある。本論文の内容は、潰瘍性大腸炎において、腺管内腔の粘液量の定量的解析が、新たな病期診断法となる可能性を示したものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。